

小学校部会活動紹介

佐藤 洋平

小学校部会の活動

2024年度は6月1日の日本教育大学協会及び全国国立大学附属学校連盟(以下全附連)共催の附属学校連絡協議会と同日に、校種別総会・小学校部会総会を開催した。その際、10月24・25日の全附連副校園長会研究会小学校部会での提案校の確認及び情報交換を行った。今回はその際発表された、研究大会テーマ「国・地域から必要とされる附属学校であり続けるために」に即した3校の提案を紹介する。

<提案紹介①>

「児童・保護者・地域と共に在る学校づくり」

信州大学教育学部附属長野小学校 校長 渋谷 孝信

本校では、大正期に創設された研究学級における総合学習の実践者である淀川茂重先生の次の言葉を教育理念に掲げている。「児童の教育は、児童にたちかえり児童によって児童のうちに建設されなくてはならない。そこからではない、うちからである。児童のうちから構成されるべきものである」この子どもをうちから育てる理念のもと、学校教育目標を「共に在る」、目指す子ども像を「ひとりだち」と据え、時代に応じて変化し続けながら、次のような取組を行ってきた。

- 1 各学級で特色ある中核的な活動に取り組んでいる。年度当初に各学級で本年度みんなで挑戦したい活動を子どもと話し合っ決めて決めている。この中核的な活動を軸に教科・領域を横断した「子どもとつくるカリキュラム」を作成し、地域や保護者と連携しながら総合学習の実践をしている。
- 2 「子どもとつくるカリキュラム」を定期的に同僚と語り合いながら更新し、将来県下各地のリーダーとして活躍するカリキュラムプランナーとしての力を付けている。
- 3 国立大学の附属学校の強みを生かし、総合学習の中で、子どもの問いや願いを見極めながら、大学の専門家との出会いの場を大切にしている。その道の専門家との出会いが子どもの学びをさらに加速させている。また、本年度は「知らない世界への冒険～信大お宝めぐり～」と題して、信州大学各キャンパスからの中継によるWeb校長講話を行っている。
- 4 附属学校の使命の一つでもある教育実習の改善に努めている。昨年度までは、観察実習を行ってから授業実習を行っていたが、本年度は「観察実習→チームによる授業実習→授業実習」というステップを試行している。また、ライフワークバランスを意識する学生の実態に合わせて「教員と語る会」を行い、教員の日常生活や魅力について語り合う場を設けている。さらに、県教育委員会と連携し、本年度初任者の先生方に、教育実習で学んだことが日々の勤務に生かされている点、教育実習で学んでおけばよかった点を回答してもらい、教育実習のカリキュラム改善に生かそうとしている。

<提案紹介②>

「附属岡崎小学校の使命について」

愛知教育大学附属岡崎小学校 校長 大槻 真哉

平成31年3月18日、文部科学省は「学校における働き方改革に関する取組の徹底について(通知)」において、

勤務時間管理の徹底と勤務時間・健康管理を意識した働き方の推進、学校及び教師が担う業務の明確化・適正化、学校の組織運営体制の在り方を柱とし、学校等が取り組むことが重要と考えられる方策について、整理した。それ以降、徐々に働き方が見直され、今に至っている。そうした動きは附属学校においても例外ではなく、本校でも行事の精選、会議のあり方や所要時間・方法の見直し等を行ってきた。

一方で、本校の使命である「教育実習生の受入・指導」「先進的な教育実践の提案」「地域貢献」について、その見直し方を誤ると、本校の存在意義や価値が低下し、地域から必要とされない附属学校になってしまうことが危惧される。

そこで、まずはこの3つの使命について、それぞれ詳細を次のように報告させていただく。

「教育実習生の受入・指導」 学校種別実習、学校体験活動、学校教育実習の期間や受入人数等

「先進的な教育実践と提案」 全体授業研究、生活教育研究協議会、研究会員制度のねらいや実施方法等

「地域貢献」 三河教育研究会の事務局、指導出張、教育論文審査の具体的内容等

その後、特に、「先進的な教育実践の提案」における研究協議会の持ち方や研究会員制度について、また、「地域貢献」の具体的内容について、広く参加者の皆様の意見を伺いたい。それにより、本校が働き方とのバランスをとりつつ、地域から必要とされ続ける附属学校へのあり方の参考としたい。

<提案紹介③>

「大学・教育委員会・地域の学校との連携の充実」

福岡教育大学附属福岡小学校 校長 田中 健悟

平成29年度の有識者会議以降、附属学校の存在意義が問われている。国・地域から必要とされる附属学校であり続けるためには、教育実習校としての役割に留まらず、「国及び地域への成果の還元」という役割に真摯に向き合う必要がある。本校の取組を紹介する。

まず、国への還元である。全国的に不登校数が増え続け、学校の在り方が問われているが、本校は、令和6年度から4年間、国の研究開発指定を受け、「令和の時代の魅力ある学校づくり」をテーマに、新しい学校の教育課程の在り方を試みている。具体的には、現行の学習指導要領を踏まえた教科学習に、2つの新領域である「探究学習」と「生活創造学習」を加えて、教育課程全体で、個別最適な学びと協働的な学びを効果的に実施し、ウェルビーイングの実現に向かうカリキュラム研究である。

次に、地域への還元である。その1点目は、「授業改善にすぐ役立つ理論や実践事例の公立学校への提供」である。例えば、①大学と連携して実施する若年教員向けの公開授業研究会(授業づくりセミナー)の実施、②教育委員会と連携して実施する教育センター研修講座への講師派遣や授業動画の提供、③地域と連携して実施する校内等研修会への講師派遣(R3実績 112件、R4実績 184件、R5実績 127件)、などである。2点目は、「専門性をもった地域の中核となるリーダー等の計画的な人材育成」である。毎年、教職員としての資質及び専門性の向上に資することを目的として、福岡県教育委員会及び福岡市教育委員会から派遣される現職教員(7名)を1年間、長期派遣研修員として受け入れており、教育研究の意義や基本的な考え方、研究の進め方などを実践的に指導している。研修終了後は、地域の公立学校に戻り、中核となって授業改善や教育研究の推進に努めている。

今後も、時代のニーズに対応し、国・地域から必要とされる附属学校でありたい。

(令和6年度小学校部会代表・東京学芸大学附属竹早小学校 副校長)